

# 平成25年度文学研究科修士論文要旨

## 典座教訓の研究

文学研究科宗教学仏教学専攻 禅学禅思想史研究(Ⅰ)専修 芹野悠樹

本論文は、道元禅師の著作である『典座教訓』の研究である。永平寺で修行させていただいた私であるが、永平寺では体で覚えることばかりで、道元禅師の教えである『永平清規』を学ぶことはなかった。そのため私は、行持や公務の意味も知ることはなかったのである。そこで自分の行ってきたことの意味を知り、これからの布教に役に立つことを研究したいと考えた時、一般の方にも身近な食、それを司る典座に関する著作である『典座教訓』を研究しようと決めたのである。

第1章では、禅宗の規則である清規の成立・発展を考察し、次に『典座教訓』や道元禅師の他の著作に多く引用されている『禅苑清規』の成立・内容を見た。その後に『永平清規』の各著作の概略を考察し、続いて『典座教訓』本文の考察を行った。清規の成立には諸説あるが、インドから中国に伝わった仏教は、教えである経とともに、教団の規則である律も伝わった。しかし中国とインドでは環境や習慣等が違い、インド成立の律では対応できないこと等があり、中国独自の規則が必要であった。それらをまとめたのが百丈懷海であり、『百丈清規』が最古の清規であると言われている。その『百丈清規』そのものは現存しないが、『景德傳燈録』の百丈章の後にある『禪門規式』には、大乘・小乗のよいところをとって作ったとある。その内容は後の『禅苑清規』や『勅修百丈清規』等、その後に制定された清規に大きな影響を与えたのである。次に『禅苑清規』の考察に入る。『禅苑清規』は授戒からはじまる77項からなる。その内容においては、三八念誦は現在でも行われているが、現在では特別な存在である知事が、元は一年限りの限定的な職であったこと、住持も特別な事情が無い限りは普請に出なければならない等、現在の禅宗教団との相違点を様々見ることができた。『永平清規』の各著作については、小坂機融『永平清規』(講座道元3『道元の著作』春秋社、1980年)を参考に成立時期や概略を述べた。特に『典座教訓』は道元禅師が宋から帰国後の初期の著作であり、これから日本に真の仏法を伝えるという思いが込められているものであることが分かる。

第2章が本題の『典座教訓』についてである。始めか

ら順を追って現代社会に生きる我々にも通じる教えの部分を中心に考察していった。その中でも第3項で取り扱った部分は、我々にも通じる教訓が多く見られる。そこには食材に対する扱い方、典座つまり自分のやるべきこと、仕事に対する考え方、調理する時の心の在り方、何事も真剣に行うことの大切さが説かれている。ここでは祖師方の話も引用され、典座という職の重要性が説かれる。どのような時も常に修行であり、どのような時も道心を持って行動すべきであることが説かれている。道具の扱い片づけ方等も、現在永平寺で行われている通りに説かれている。食材を生かすのは典座であり、食材の良し悪し、多い少ない等を問わずに、食材と真剣に向き合い調理することによって、どのようなものも最高の食材になることが説かれている。次に忙しい典座の勉強の仕方、調理に使う水や火の扱い等の心得については、仏道を行じる典座は世間一般の考えをしてはならないとし、どのような料理を作る時も同じように調理するようにと説かれる。次に、典座は常に精進し、先人を越える清らかさ丁寧さを持って調理し、向上心をもって職にあたる等、主に典座の行い、心がけについて考察した。

第3章は、道元禅師が宋で学んだことが書かれた部分であり、道元禅師の生の声が聞こえてくる部分である。僧食九拌、宋の典座と建仁寺の典座との行いや心持の違い、「他は是れ吾にあらず」と言った老典座との出会い、阿育王山の老典座との交流等、『典座教訓』を記すことの大きなきっかけになったであろう事が多く書かれている部分の考察を行った。

第4章は、喜心、老心、人心の三心について書かれている終わりの部分である。三心の行い、即ち何事も喜んで行い、何事も親切心を持って行い、何事にも動じず平等な心をもつこと等を、現代社会と照らし合わせながら考察した。

最後に、以上考察してきたことをまとめて述べた。『典座教訓』の教えは典座だけではなく、全ての人々に通じるものである。現代人が忘れつつある喜心、老心、大心を持って日々精進努力していくことが、よりよい未来に向かうために必要なことであるとする。

# 道元禪における心の研究

文学研究科宗教学仏教学専攻 禅学禅思想史研究(Ⅰ)専修 レ・キム・チュオン

本論文は、道元禪における「心」について研究したものである。本論は次の三章から成っている。

## 第一章

### 道元禪師の思想

## 第二章

### 典座教訓における心

## 第三章

### 正法眼蔵における心

第一章では、道元禪師(1200-1253)の思想の成立と、その思想の特色について述べた。

禪師は8歳の時に母を亡くしたことによって世の無常を親じた。これこそが出家の動機になったと思う。『正法眼蔵随聞記』には、「我レ初メテマサニ無常ニヨリテ聊カ道心ヲ発シ、アマネク諸方ヲトブラヒ、終ニ山門ヲ辞シテ学道ヲ修セシニ」(『道元禪師全集』(以下『道元全』と略称す)下巻471頁)とあり、無常観というもの、禪師の思想を考える場合、非常に重要である。

禪師は出家して、比叡山で修行している時に、「本来本法性、天然自性身」と説かれているのに、何故諸仏は発心修行するのかという疑問を生じた。その後比叡山を下り、建仁寺の明全(1182-1225)に参じ、24歳の時、仏法を求め、明全と共に宋国に渡ったのである。禪師が慶元府の港に停泊中の船内に留まっていた嘉定16年(1223)5月中、阿育王山の老典座が船にやって来た。この時、典座と問答をしており、その後天童山景德寺で再会している。また、天童山の老典座とも問答しており、これらの話は『典座教訓』に収められている。この二人の典座は、禪師に大きな影響を与えていると思う。

何と云っても禪師に大きな影響を与えたのは如浄である。『宝慶記』は、禪師が如浄に参じた記録であるが、そこに記されている如浄の「もし一切衆生本よりこれ仏なりと言わば、かえって自然外道に同じきなり」(『道元

全』下巻372頁)という説示によって、長年の疑問は解決することになる。また、「参禅は身心脱落なり。焼香・礼拝・念仏・修懺・看経を用いず。祇管に打坐するのみなり」(『道元全』下巻377頁)の如浄の言葉は、道元禪師の思想形成に大きな影響を与えている。「参禅(修)は身心脱落(証)なり」ということは、修と証とが同じであることである。『弁道話』に説かれるように、修と証とを区別するのは外道の見解であり、仏法においては修と証は一等である。したがってその修行は「証上の修」と言われ、また「本証妙修」とも言われる。

第二章では、『典座教訓』の心について述べた。

典座は道心を持たなくてはならないし、三心という三つの心を保持しなくてはならない。三心とは、喜心・老心・大心である。喜心とは、喜悅の心である。日々のつとめを行うときに自分の心に不満がないことである。老心とは、父母がわが子のことをつねに忘れないような心である。このように三宝のことを思い続けるのである。大心とは、心を大山のように、また大海のように深く広々として、偏することなく党することのない心である。禪師は典座の仕事と修行とを同等と見ている。

第三章では、『正法眼蔵』の中で心を説く巻、即ち「身心学道」「即心是仏」「心不可得」「三界唯心」「発菩提心」「発無上心」の巻を取り上げて、そこに説かれる心について考察した。心はそれぞれの巻でさまざまに説かれ、その意味は甚深である。道元禪師は、心について、身心一如、一心一切法・一切法一心、三界唯心などと言われ、それを詳しく説かれている。禪師の立場では、心は自他一体としてあり、尽十方界が心そのものであると言える。

道元禪師の世界は体験であり、証得の世界であるから、文字によって理解することは大変困難である。禪師の真意を理解するためには「只管打坐」を行じなければならないと考える。

# 宋朝禪の研究

——大慧宗杲と宏智正覚を中心として——

文学研究科宗教学仏教学専攻 禅学禅思想史研究(Ⅱ)専修 富川 拓哉

今回の修士論文では、大慧宗杲と宏智正覚を中心として、宋朝禪の思想や日本へ与えた影響についてまとめた。

第一章では宋王朝の禪宗の状況について述べた。979年に中国統一を果たした宋王朝は、高級官僚である士大夫が支配層となり、仏教も彼らと同じく国家や皇帝に奉仕すべきものと定められた。禪僧は為政者の精神的支柱となり、良き相談役となつて、積極的に天下国家の問題に関わっていくのである。

臨済義玄を祖とする臨済宗はこの宋王朝の頃から、「楊岐派」と「黄龍派」に分派し、隆盛していくこととなる。この臨済下の二派と唐王朝末期から宋王朝に至るまでに栄えた「曹洞宗」「雲門宗」「法眼宗」「沩仰宗」を合わせて「五家七宗」といい、このような概念が確立した結果、「公案」の源流の一つとなる言説が重視されるようになった。

洞山良价とその法嗣の曹山本寂を祖とする曹洞宗は、宋王朝の初期においてはあまり目立った存在ではなかったが、芙蓉道楷が山東省淄州に流罪となったのをきっかけに、河北に曹洞宗が弘まることとなり、後の金王朝の時代に大いに教化を進めることになるのである。

第二章では大慧宗杲の生涯と看話禪の思想をまとめた。安徽省宣州の寧国に生まれた大慧は、19歳の時に故郷の宣州を離れ、各地の禪匠に参じて学び、臨済宗楊岐派の圓悟克勤の会下に参じた際に、大悟して法を嗣いだ。紹興4年(1134)には福建省の洋嶼庵に転じ、ここで曹洞宗の宏智正覚、真歇清了一派の黙照禪を批判し、看話禪を確立させ、49歳の時には浙江省の径山能仁禪院に住持して、看話禪の宣揚に尽くす傍ら、千人の学徒を集めたことから「臨済の再興」と称された。

看話禪は公案禪ともいい、過去の祖師達の言行について師と問答を交わしながら悟りに至ることを目的とする禪で、話頭を端緒として自己を見出し、悟りへの道標とする修行方法である。しかし、看話禪が大成した一方、奇矯な問答や突拍子もない喝声だけで満足する者や、坐禪を軽視するような考え方をする者がおり、その点を宏智正覚に批判された。

第三章では宏智正覚の生涯と黙照禪の思想をまとめた。宏智は山西省隰州隰県に生まれ、18歳の時、各地のすぐれた禪僧に参学修行することを決め、23歳の時、丹霞子淳の会下で開悟した。その後、住持を欠いていた天童山景德寺に迎えられ、約30年にわたって伽藍や僧

堂の復興に尽力し続け、禪風を挙揚した。

この禪風は黙照禪と呼ばれ、菩提達磨(?-528)以来の仏本来のあるがままの坐禪を標榜し、悟りを得ることを目的とせずに、ひたすら行うというものであった。宏智は「本来」「元来」という言葉で徹底した自己肯定を主張し、坐禪は自己と親しむもので、悟りは初めから自身に備わっていると説いた。つまり、自己が完全な仏であり、悟りそのものということである。

しかし、悟りを初めから自身に備わっていることは、強く現実を肯定することにも繋がり、煩惱をそのまま認めてしまう自然外道の立場に陥ってしまう危険性を内包していた。大慧はそのような表面的理解に立つ人々を「黙照邪禪」として批判した。

第四章では臨済禪と曹洞禪の日本へ与えた影響についてまとめた。宗派としての禪宗が日本に伝わったのは、建久2年(1191)に臨済宗黄龍派の虚菴懷敞(不詳)に嗣法した栄西(1141-1215)が帰朝した時とされる。栄西は鎌倉幕府の帰依を得て、鎌倉の寿福寺や京都の建仁寺の開山に迎えられた他、禪による天台復興を唱えた『興禪護国論』や、茶の採取・製法や効能について述べた『喫茶養生記』などを残した。

一方、日本曹洞宗の開祖として知られる道元(1200-1253)は入宋して宋の天童如浄(1163-1228)から曹洞禪を学んだのであるが、日本に弘めようとした禪は宋代の曹洞禪と異質なものであった。自らの思想を『正法眼蔵』に著し、その教説は『永平広録』などに遺され。また、曹洞教団の生活規律を定めた『永平清規』を著した。

今回の修士論文で判明したのは、宋代禪宗の中で、特に大慧を中心とする臨済禪は、社会に適應する柔軟性を持つが故に、大きく弘まったということである。宋王朝の文化的基底を支えた士大夫層の要請に応じることで看話禪が確立し、方向性の異なる黙照禪を枯木禪と批判する思想的対立の中で発展していった。さらに、日本に伝わった当初は、顕密の併修という兼修禪が起こって旧仏教勢力との妥協が図られた。

ただ、日本の臨済禪は大慧の看話禪が直接伝わったのではなく、虎丘紹隆派の看話・黙照を融合した禪が臨済禪として導入された。禪の二十四流中で二十一流が臨済禪であるが、多くは虎丘派下の松源崇岳の系統であり、その伝播を明らかにするのが次の課題と考えている。

# 『遠野物語』の成立と影響

文学部研究科宗教学仏教学専攻 宗教学宗教史学研究専修 杉田大和

本論文では、日本の民俗学者である柳田國男と、刊行百年を過ぎた柳田の著書『遠野物語』について研究したものである。内容は主に柳田の人生を振り返り、柳田がどのような経緯のなかで『遠野物語』を構想し、またどのような考え方をもち、執筆したかを考察した。さらに『遠野物語』という書物が、物語の舞台となった岩手県遠野市に与えた影響について現地に行き調べてきたので、そのことも論じたい。

第一章では、柳田の生涯を記述している。柳田は幼少の頃より非凡な才能を持ち、抜群の記憶力を持っていた。一時期家族から離れ、預けられた家では大量の蔵書を読み、その殆どを記憶したとされる。一方で、子供の頃の柳田は、体が弱く、そのこともあってか、両親は彼のことを少し甘く育てたらしく、我儘で奔放な性格であったという。そんな柳田が家族と共に下総の布川（現在の茨城県利根町）に引っ越し、そこで飢饉に苦しむ人々の生活を目の当たりにする。この体験から、柳田は飢饉を無くすという目標を立て、柳田が将来官僚へと進むきっかけとなり、大学を卒業してからは、農商務省に入る。主に東北地方を巡り、現地の調査を行った。この時に、柳田は現地で知り合った村の人々から、土地に伝わる民話・伝承・伝統的狩猟方法などを聞き、それを集めた。

官僚として働きながらも、柳田は日本各地の村に伝わる民話や伝承に興味を持っていた。明治四十二年には、宮城県椎葉村の村長より聞いた伝統的狩猟方法等を纏めた『後狩詞記』を自費出版し、その一年後に『遠野物語』を出版した。これらの書物が柳田民俗学の出発点である。

第二章では、『遠野物語』の成立に関して述べる。『遠野物語』は、柳田が東京で出会った岩手県遠野市出身の学生で作家の佐々木喜善から遠野に伝わる民話や伝承を聞き、それをまとめたものである。その多くが、佐々木が遠野に住んでいた時に、祖父や村の人などから聞いたものである。『遠野物語』は自費出版ながらも、ある程度の人気を博し、後に新たに集めた民話を載せた『遠野物語拾遺』も出版された。柳田に『遠野物語』執筆のきっかけを与えた佐々木に関しても言及し、彼と柳田の関係について調べてみた。

第三章では、『遠野物語』の内容の構成に関して述べる。

また『遠野物語』内で登場する神々と妖怪の種類は様々であり、特に有名なのは「ザシキワラシ」、「オクナイサマ」、「河童」である。本章では、主にこれらの神と妖怪に関して述べる。

第四章では、現在の遠野市について述べる。二〇一三年九月に、実際に遠野市へ行き、その時に見てきた遠野市の姿は、当然『遠野物語』が執筆された当時とは違うものである。しかし、柳田に影響を与えた遠野市は、今では『遠野物語』から逆に影響を受け、『遠野物語化』した観光地として成り立っている。遠野市各地には、マスコット化した河童のマークが見られ、『遠野物語』や柳田に関した博物館が幾つも点在し、観光客向けに、訛りをそのままに、当時の様に民話を聞かせる「語り部」がいる。『遠野物語』に登場する「サムトの婆」と言う神隠しに遭った老婆が居たとされる場所には、その物語に関して記した記念碑があるが、比較的新しい物であり、本来はそこになく、『遠野物語』の人気を受けて立てられたことがわかる。

第五章では、『遠野物語』が与えた遠野市への影響に関して更に述べる。戦後、遠野市は民俗学の父と呼ばれるようになった柳田が執筆した『遠野物語』の舞台として広く知られるようになり、民俗学を学び志す人にとって、聖地の様な場所となり、定期的に民俗学の学会やイベントが開かれるようになる。また、『遠野物語』を読み影響を受けた一人に、『ゲゲゲの鬼太郎』で知られる漫画家の水木しげるがおり、水木は遠野市の祭りがある時期には、遠野市に訪れるなどし、漫画版『遠野物語』を執筆、市のPRマスコット「かたるくん」をデザインするなど深い関係がある。

以上が、本論文の主な内容である。刊行から百年を越えた『遠野物語』であるが、まだ人々を魅了し続けている。遠野市は3・11による震災を乗り越え、隣接する花巻市と連携するなどし、『遠野物語』の魅力を伝えようとしている。まだまだ『遠野物語』や遠野市について語るべきことは多くある。これからも、こうしたことに関心を寄せ『遠野物語』の魅力と歴史的価値を考えていきたい。

## 昭和戦中・戦後における大蔵省の財政政策と変容過程

文学研究科歴史学専攻 日本史研究(Ⅲ)専修 小林 祐 太

本論文では、昭和戦中・戦後において大蔵省の財政政策がどのように変容していったのかを、大蔵省の予算編成権をめぐる企画院や軍、GHQなどの政治勢力との関係から明らかにした。従来の昭和期政治史研究において十分に検討されてこなかった大蔵省を、予算編成過程における各政治勢力との関係という視点から分析する。そして戦中・戦後の財政運営に際して、大蔵省がどのように対応していったのかを検討する。

第1章では、企画院を中心とする総合国策機関の設置に対して、大蔵省は財政運営の必要性から設置に推進したことを明らかにした。明治憲法体制による各省の割拠性を克服するものとして考えられた企画院を中心とする総合国策機関の設置は、大蔵省の予算編成に対して影響を及ぼすものであった。しかし大蔵大臣が、総裁を兼ねることにより、予算編成において大蔵省に都合の良いものにしようとした。そして大蔵省は、日中戦争開始前後において増大しつつあった国際収支に伴う物資需給の問題を、財政経済三原則の方針に則る政策を遂行するため、企画院の作成する物動計画によって対処しようとした。しかし企画院や大蔵省による物資需給の均衡を目指した輸出入の政策は思うようには行かず、賀屋興宣大蔵大臣の政治問題及び企画院の総合政策の遂行における問題にまで発展した。これに対して近衛文麿首相は、池田成彬の入閣と五相会議の開催によって、大蔵省の政治問題の解決及び企画院の政策調整機能を補完した。

第2章では、大蔵省主計局移管による企画院拡充の問題が、大蔵省との対立を起こす可能性があったが、直面する軍事予算の策定について協調して陸海軍に対処したことを明らかにした。主計局の移管は、大蔵官僚の青木一男が企画院総裁に就任したこと、企画院拡充をめぐる陸海軍の対立に解消した。また日中戦争開始後の増加する軍事予算の問題に対して、大蔵省が予算査定根拠としたのが企画院の作成した物動計画であったことを指摘した。しかしその物動計画をめぐる企画院と陸海軍の軋轢が国内体制強化を必要とし、大蔵省主計局の移管を目指した企画院の拡充問題は、陸海軍の対立を再び起こしたのである。

第3章では新体制期から起こる予算編成の変化は、太平洋戦争期においてさらなる変化をしたことを明らかにした。軍事予算と物動計画をめぐる陸海軍の対立は、新体制期の予算編成における重要国策の先議面定へと発展し、企画院は総合国策機関としての役割を果たし、日米開戦をめぐる過程における物資の重要度によって、予算編成に対する企画院の影響力は増した。しかし戦局の悪化に伴う物資供給が困難になる企画院は物動計画の官庁へと変化することになった。大蔵省は、短期間に変化する状況に予算として対応させるため、予算編成における予備費の増加を行い、予算を臨機応変に執行させようとした。しかしこれは各省に対する予算査定を簡素化させ、大蔵省の最大の権力であった予算査定による予算編成権は、機能しなくなった。

第4章では、大蔵省の予算編成は、戦中から続く変化によって行われていたことを明らかにした。終戦後、戦時中の予算は執行が取り止めとなったが、太平洋戦争末期から続く予算編成における予備費の対応は、終戦に伴う経費などに使用され、戦中から続く体制により執行されていた。また議会の開会延期により、年度当初において予算が執行されないという事態に対しても、戦中からの制度により財政運営がなされたのである。この戦中から続く制度と戦後を分けたものは憲法改正及び各種財政準則であった。憲法改正による議会の予算に対する権限強化や、GHQによる大蔵省の機構改革及び予算編成に対して変化を起こす動きとして現れた経済安定本部の設置によっても、予算編成における権限であった予算編成権は、大蔵省に存置されたのであった。

以上、結論として、昭和戦中・戦後において大蔵省の予算編成権はさまざまな政治勢力の中で変化し、一部ではその政治勢力が望んだ形に達成された。しかし予算の査定を中心とした予算編成権は、一貫して大蔵省に残されたのであった。さまざまな事態のなかで、大蔵省がこれを達成できたのは、大蔵省とその政治勢力との協調あるいは利害の一致があったからである。この予算編成権こそ、各政治勢力が政策を遂行する上で重要なものであり、大蔵省においても同様であった。

# 綱吉政権下の側用人

文学研究科歴史学専攻 日本史研究(Ⅲ)専修 柴田 富彦

本論文の課題は、綱吉政権の政治運営を通して綱吉政権下の側用人について明らかにすることである。先行研究では、綱吉政権下の側用人は老中を中心とした政治への組み込みを前提とした上で論じられてきた。しかしそれでは、将軍綱吉が側用人を何のために設けたのか、側用人という役職の存在意義が分からなくなってしまう。以上のことを踏まえ綱吉政権下の側用人の独自性を明らかにすることが本論文の最終的な目的である。

第一章では、側用人創設過程と側用人の秩序や職務について検討した。天和元(1681)年12月11日に牧野成貞が側用人に就任して以降綱吉政権下の側用人は、将軍綱吉の家格や石高に基づかない新しい政治秩序のもと柳沢吉保をはじめ外様大名や高家を側用人に就任させた。側用人内の秩序は将軍綱吉の意向のもと、「格」や「並」が決められ進物の秩序などに支えられて形成されていた。職務においては、元禄8(1695)年までの牧野成貞中心の体制の時期では、牧野成貞とその他の側用人とでは職務に差があり、奉書も牧野成貞のみが老中との連署で発給していたが柳沢吉保中心の体制では側用人内の職務の差はなくなり奉書も側用人の連名で大名に発給するようになった。

第二章では、八戸藩2代藩主南部直政を例として、外様大名出身の側用人の実態と側用人就任が与えた藩への影響について考察した。将軍綱吉の新しい秩序形成は八戸藩主南部直政の側用人就任に繋がった。直政は盛岡藩の支援のもと外様から譜代へ昇格して側用人に就任したこと、それに伴い盛岡藩から南部家の由緒書が幕府へ提出されていたことがわかった。また、直政の側用人としての勤めは主に、宿直と御成などの供奉であった。直政は約2ヶ月という短期間で側用人を辞めることになる。しかし側用人就任は、八戸藩が盛岡藩の支藩ではないという直政の非支藩認識を持たせるものであった。

第三章では大名家側の史料から側用人と老中の役割の違い、寺社の史料から元禄9(1696)年7月に寺社修復担当を命じられた柳沢吉保と寺社の関わりについて論じた。会津藩・仙台藩などの史料からわかることは老中は通常の献上物及び藩札発行・藩内における死罪・領内の不作に関わっていたということである。側用人は、主として内証での献上及び将軍綱吉が始めた御能・講釈に関与していた。

しかし藩札発行や領内の不作といった公儀性に関わる

事柄には柳沢吉保や松平輝貞も関与している。そして柳沢吉保は元禄9年7月に寺社修復の担当を命じられた。その背景には、寺社修復の案件が老中や寺社奉行を通すと御用繁多や財政的な問題から中々進まなかったことで内証ルートが重要性を増したことがあり、それが吉保の寺社修復の担当へと繋がった。吉保の担当のもとで寺社修復は、幕領の割譲や内証金の下賜という形で進んでいた。

第四章では、将軍交代時の側用人のあり方と世間の評価について考察した。柳沢吉保は、宝永2(1705)年を境に次第に儀礼的行為や政務から離れていき、代わって松平輝貞が吉保の職務を引き継いだ。そして将軍綱吉死去後側用人の松平輝貞や松平忠周は辞職するが柳沢吉保は将軍家宣にその後も引き続き政権内に残るように命じられた。しかし吉保は病身のため隠居願を出すとともに、間部詮房の指図のもと拝領屋敷地の返上を行った。世間では、そうした柳沢吉保に対して綱吉政権への批判の矛先として吉保を非難した。

以上のことから先行研究で論じられていたように、将軍綱吉は側用人を老中の制度の中に組み込み政権を運営していたのではなく、老中の体制と側用人の体制の二つをそれぞれ用いて政権運営を行ったといえる。その中で老中は従来から存在していた政務(通常の献上や藩内の死罪など)を担当し、側用人は綱吉によって新しく始められた事柄(御能や講釈、寺社修復)など内証の政務を担当した。しかし、藩札発行や領内不作といった公儀性の高いものについては老中とともに側用人も関与していたことは注目される。

側用人の秩序については将軍綱吉の意向により、「並」や「格」といった側用人の秩序が決められていた。そして側用人の身分は表の役職の進物と対応しており牧野成貞や柳沢吉保は老中並であった。牧野成貞中心の体制から柳沢吉保中心の体制に移行すると、側用人内の職務の差は少なくなり「職」として側用人の体制が形成され独自性が強まっていった。また将軍綱吉による家格や石高に基づかない新しい秩序形成によって側用人に就任した八戸藩主南部直政は、側用人を辞めて以降、盛岡藩の非支藩であることを主張していることから、将軍綱吉による新しい秩序形成は本藩一支藩関係に一定の影響を与えるものであったと考える。

# アヘン戦争以前における清朝政府の嚴禁論・弛禁論

文学研究科歴史学専攻 東洋史研究(Ⅱ)専修 石 黒 詩 織

アヘン戦争とは、産業革命を迎え、自国で生産した毛織物の市場を探していたイギリスと、中華思想により自分たちが世界の中心であると考えていた中国との間で起こった戦争である。この戦争によって中国は、列強諸国の侵入および近代化への道を歩かされることになった。

では、アヘン戦争以前は、中国という国はいかなる国だったのか、どのような考え方をしていたのか。また、イギリスは中国をどう見ていたのかについてこの論文では考察している。そしてアヘン戦争でかかすことのできない人物である林則徐と琦善を通してその行動や考え方を分析する。

第一章では、中国から見たアヘン貿易ということで、中国が貿易という行為をどのように考えていたのか。イギリスの使節に対する対応はどのようなものであったか。アヘン貿易が開始され、その結果、侵入したアヘンは中国にどのような影響をおよぼしたのかについて歴史的背景を押さえながら論じた。

第二章では、第一章とは逆にイギリスからアヘン貿易にアプローチする。イギリスが中国に求めていたものや、アヘン貿易をおこなうまでの経緯についてである。当時、イギリスの植民地であったインドにも目を向けることで、アヘン貿易におけるインドの役割やアヘン生産についても多角的視点から言及した。

第三章では、他の国から見た対中国貿易ということで、主にアメリカとロシアについて言及した。特にアメリカは、四角貿易を語るうえで外すことのできない国である。アヘン貿易では、イギリスに次いでアヘン輸出量が第二位になり、多くのアメリカ人商人がアヘンを取り扱うなど、アヘン貿易の面でも、関わりの深い国であった。

第四章では、林則徐のアヘン嚴禁論の行動と結果について言及する。林則徐の提唱したアヘン吸飲者死刑論とはどのようなものだったのか。それは、清朝政府の皇帝や官僚たちにどのように受け止められたのかについて言及している。ここでは、林則徐に影響を与えた人物たちにも着目した。特に魏源は、中国だけでなく、幕末の日本にも影響を与えた人物である。その点を重視した。

第五章では、弛禁論と琦善の林則徐の嚴禁論に対する行動と結果である。アヘンの害が深刻になるにつれて清

朝内では様々な意見が登場した。許乃済の弛禁論はどのような主張だったのか、それを支持した者や、弛禁論の背景にも言及した。それによって、時代的特色を導き出した。

ところで、琦善は、なにかと林則徐と比較されることが多い人物だが、彼が取った行動やイギリスからの評価などから、彼がどのような人物だと見られていたかについても追究した。林則徐も彼らには手を焼かされることになった。嚴禁派・弛禁派のどちらにも属さない日和見ともいえる一派についても取り上げている。彼らは皇帝の顔色を見て行動し、自分たちに有利な方につくという一派であった。その意味を考察した。

研究のなかで、アヘン貿易はたんに中国とイギリスという二国の間だけの問題ではなく、そこにはアメリカなどの様々な国が関係していることがわかった。多くの国の思惑や駆け引きが絡まり合って、それが表面に噴出したのがアヘン戦争であると私は考えている。

需要が急増した茶やヨーロッパにはない品物を手に入れ、自国の生産品を売り込みたいイギリスと、貿易は恩恵であり、そちらが望んでいるからそれに応じるという態度の中国という図式に、アメリカの躍進というものが加わった。その結果、注目すべきは、アヘン貿易は、従来の三角貿易から四角貿易へと変化を遂げた。そこに私は、中国と最初に対等な条約を結んだロシアと、思想の面で影響を受けた日本を加えてさらに多角的な貿易構造を提示した。これによって、より中国が他国に与えた影響を鮮明にでき、アヘン戦争での中国の敗北、その後の列強の進出という衝撃の大きさをよりあらわすことができると考えたからであり、自分のオリジナリティーを出せると確信したからである。

アヘン貿易の際のアヘンや茶などの商品や手形の流通にも目を向けることで、アヘン貿易が多角的な構造をしていたことも見逃せないことである。こうして、アヘン戦争にいたるまでの経緯や当時の国際情勢を明白にすることで、世界にアヘン戦争が与えた影響や、その意義をより鮮明にでき、中国の歴史の転換点ともいえる出来事であることをあらわすことができた。

## 五・四運動における日本排斥の実態と本質

——現代の歴史教育との関連——

文学研究科歴史学専攻 東洋史研究(Ⅱ)専修 奥 谷 誌 織

本論文の目的は、五・四運動期に対する実証研究を当時の新聞資料を使って行うことと、現在使われている日本および中国の高等学校の教科書を精査することである。前段階として実証研究を行い、それを基礎に、教科書比較をすることによってそれぞれの教科書の問題点および長所・短所が浮かび上がらせ、それぞれにコメントを付した。

第一章「五・四運動の実態と推移」では主に当時の新聞を使用し五・四運動の推移を精査した。使用する資料としては『東京朝日新聞』および、『中外新報』を中心に『大阪毎日新聞』と『上海時報』を適宜引用した。中国の記事を読むことによって、学生運動の様子が臨場感をもって書かれており非常に興味深いものとなった。また日本・中国に関わらず多くの新聞記事を読むことによって、五・四運動のイメージが日中関係のみならず欧米諸国との関係を発見できたことは大きな意義であったと考えている。さらに中国以外のアジアの国で五・四運動の波及があったことにも触れた。

第二章では「中国における日貨排斥」について論ずる。日本と中国の貿易統計の比較や商業活動の推移や規模を明らかにしていった。どのような製品に対して排斥があったのか。工業製品だけであったのか、もしくは生活必需品にまで広がっていたのか。また期間はどれくらい続いていたのか。排斥の量はどのくらいであったのかを比

較検討した。丁度、第一次世界大戦の終結期と五・四運動の時期が合致していたため、日中貿易を検討する際、他国貿易の増減もかなり発見することができた。これによって五・四運動期の直接的な貿易の増減を明白にし、日貨排斥の具体的状況の一端を解明した。

第三章では「現在の歴史教育とその展望」について論ずる。アジア情勢の悪化から、私は歴史教育のあり方を再考する必要があると以前から考えていた。日本の歴史教育の問題点を挙げ、現行の高等学校の歴史教科書、中国国内で主に使用されている国定の歴史教科書（近現代版）、そして日中韓の歴史研究者たちが作成した『未来をひらく歴史』および続刊の『新しい東アジアの近現代史』の五・四運動前後の記述を精査した。特に五・四運動と新文化運動の記述の仕方には大きな違いがあった。五・四運動が新文化運動に包括されている立場と、逆に五・四運動が新文化運動を包括している立場がみられた。どちらを重視するかはそれぞれの考え方によって異なるであろうが、私は新文化運動という思想、基盤があったからこそ五・四運動が起きた、というスタイルをとっている。また教科書の中には三・一独立運動と五・四運動とを並列関係として扱っているもの、それぞれの本質の違いを記述した上で比較しているものまで様々あり、同じ日本国内の教科書でも大きな変化を見つけ、分析したのが第三章の意義である。



# 古代ローマ期におけるジェンダー観

## ——ポンペイの住宅構造を中心として——

文学研究科歴史学専攻 西洋史研究(Ⅰ)専修 板 津 由 華

本論は、ポンペイの住宅構造の変容と空間利用を中心として、古代ローマ期のポンペイにおけるジェンダー観の実態を明らかにすることを目的とした。

本論で研究対象とした古代ローマ都市ポンペイは、その都市機能を停止する直前まで多神教の都市として栄えていた。このポンペイは、ローマ帝国が多神教から一神教へと移行する前——ポンペイにキリスト教徒が存在したことは確認されていない——の社会・文化をそのままに現代へと伝え、かつローマ時代およびそれ以前の古代人の生活の様子をありありと残している点でも非常に興味深い遺構となっている。また、この都市ポンペイは、ジェンダー観が比較的厳しいギリシアの文化とジェンダー観の緩やかな側面を持つエトルリアの文化に、その中間色ともいえるローマの文化を複合させた多面性を持ち、かつ多神教から一神教へと移行する前の都市文化であることから、ジェンダー研究の対象として十分に魅力的な都市といえるだろう。

序章では、これまでのジェンダー史研究の流れと、本論では、古代ローマ期のジェンダー観を考察することの意義を明確にすることを目的とした。ここでは、古代ローマ期のジェンダー観を明らかにすることが現代社会のジェンダー規範へと繋がる道筋をいくつか照らす上で重要な位置を占めることを示唆している。

第1章では、ポンペイの都市及び住宅形成の変遷を辿り、都市及び住宅の変容、住宅空間の利用の変化から、パトリア・ポテスタス *patria potestas* (家父長権) の弱体化の原因を探ることの可能性について述べた。

第2章では、主に紀元前1世紀の建築家であるウィトルウィウスの史料を用いて、ポンペイ住宅の原型となるアトリウム *atrium* 式住宅とペリスティリウム *peristylum* 式住宅の構造とその空間利用、そしてその変遷を「メナンドロの家」という具体的な住宅事例を挙げつつ考察した。アトリウム式住宅において、パテル・ファミリアス *pater familias* (家父長) の重要な活動である伺候と饗宴でのもてなしのために利用する住宅の核空間(饗応空間)が、パテル・ファミリアスを象徴する空間(公的空間)とも言えるアトリウムから、従来の研究で一般に私的空間として位置づけられてきたペリスティリウムへと移行したことで、公的空間と私的空間であるとはっきり区別してきた従来の研究を修正し、明確な区分はできなくな

ったことを示した。

また、この住宅空間の移行とその利用の変化の時期が顕著に現れた時期が、第3章で示したパトリア・ポテスタスが弱体化し、女性の地位が向上するというジェンダー観の変容が見てとれる時期(後1世紀)と一致することを指摘した。

第2章では主にポンペイに残る住宅遺構を例にして論じたが、ポンペイには文献史料がほとんど残されていないことから、第3章では、ローマとポンペイの多方面における相関関係を追究し、その上でローマの文献史料を吟味してその論を補完した。その主要な史料として、後1世紀頃に活躍したローマの政治家、小プリニウスの書簡を用いた。彼はウェスウィウス山の噴火により没したポンペイの最期の様子を伝える重要な記述を残した人物である。彼の書簡に表れるパトリア・ポテスタスの弱体化と女性の地位向上が顕著に認められる後1世紀という時期は、ポンペイ住宅において、ポンペイ住宅の核空間である饗応空間が家父長を象徴するアトリウムからペリスティリウムへと完全に移行する時期と合致している。都市構造が社会制度の縮図であるように、住宅が家父長制度の縮図であることから、ポンペイにおける住宅機能の移行とパトリア・ポテスタスの弱体化にも密接な関係があったと指摘することができる。この第3章では、富裕層が利用する住宅形態のアトリウム式住宅とペリスティリウム住宅以外に、貧困層が住んでいたと考えられる集合住宅インストラ *insula* についても少し触れた。貧困層についての史料がほとんど残されていないことは古代史研究の困難な点でもあるが、僅かながら貧困層の生活についても言及した。

終章においては、ポンペイの街の壁に残されたグラフィティ(落書き)から、ポンペイの男性が女性に対して持つジェンダー観及び女性が男性に対して持つジェンダー観について述べた。また、当時の女性の政治参加活動がどのようなものであったか、そこから見る女性たちの社会的影響力についても考察した。

総じて、本論では、古代ポンペイにおけるジェンダー観は紀元前と紀元後で大きく変容したことを示した。そしてこの変容が住宅空間の移行期と一致することから、社会構造・住宅構造の変化とジェンダー観の変容には密接な関係があることを明らかにした。

# フランス革命期の兵士 F. ヴィゴ＝ルシヨンとボナパルト

文学研究科歴史学専攻 西洋史研究(Ⅰ)専修 吉 田 沙也佳

ナポレオン・ボナパルトは、革命軍の一翼を担ったイタリア遠征軍最高司令官に任命されると、軍事的能力を発揮して北イタリアを征服した。しかしイタリア遠征軍の勝利は最高司令官だけではなく、革命を自分の手で守ろうとする士気の高い兵士によって獲得されたものである。

本論文では、近年の軍事史関連のフランス革命史研究の動向をふまえて、イタリア遠征軍の兵士の軍隊生活に着目した。イタリア遠征軍兵士フランソワ・ヴィゴ＝ルシヨンが記した従軍記である『ナポレオン戦線従軍記』から、革命を守るために積極的に戦った兵士の軍隊生活について分析した。

第1章ではヴィゴ＝ルシヨンの略歴と『ナポレオン戦線従軍記』の構成内容からヴィゴ＝ルシヨンの生涯を概観した。ヴィゴ＝ルシヨンは1774年に南フランスのモンペリエで生まれた。18歳の時イタリア遠征軍所属のエロー県第1志願兵大隊に志願し、以後1837年までの45年間軍務に就いた。ヴィゴ＝ルシヨンは自分の従軍のようすを記録に残そうと考え、戦場で持ち歩きながら従軍記を執筆した。

第2章ではフランス革命直後の兵員不足のなかで行われた軍隊編成の方法と軍隊制度の改革について検討した。革命後も旧国王軍が継承されたが、1791年に強制力を伴わない国民志願兵制度が創設され志願兵の徴募が行なわれた。しかしオーストリア、プロイセンとの戦争が勃発すると兵員が不足し強制力を伴う「30万人の募兵」と「総動員」が実施される。さらにアマルガム法によって半旅団が組織され、旧国王軍と志願兵の間に協力関係が築かれた。

ヴィゴ＝ルシヨンは親友に軍務に就くことを勧められて革命軍に志願した。この時、未だ革命軍の一員でないことに恥ずかしさを感じたと従軍記に残している。南フランスのモンペリエのヴィゴ＝ルシヨンの周囲には、当時ある程度の年齢に達した者は軍務に就き革命の役に立つものであるという考えが波及していたのである。

第3章では第1次イタリア遠征中と帰還後の従軍記の記述からヴィゴ＝ルシヨンの人物像を分析した。ヴィゴ＝ルシヨンは、第1次イタリア遠征に参加した当初は、

祖国に勝利を持ち帰るために戦っていた。第4回目の従軍では、従軍記に同郷人の戦友や同じ第32半旅団の戦友が登場し、軍隊生活を戦友とともに過ごすようになる。ヴィゴ＝ルシヨンは仲間を必要とし大切にす人物であった。第1次イタリア遠征の戦闘中に負傷した時は逃亡することなく戦友を信頼して救助を待った。第1次イタリア遠征の直後にイタリアで出会った恋人と離別できず、婚約し所属する師団を除隊しようとした時は、上官や戦友に説得されて従軍を続けた。ヴィゴ＝ルシヨンはエジプトから帰還後退役したが、何もしない生活に居心地が悪くなり、革命軍兵士が軍務を行っているようすを見て羨ましく思った。そして退役後わずか1ヶ月半で軍務に復帰した。ヴィゴ＝ルシヨンにとって、革命の役に立つ軍務を行ないながら戦友とともに過ごす軍隊生活は故郷よりも居心地の良いものとなっていた。

第4章ではボナパルトがヴィゴ＝ルシヨンの軍隊生活に与えた影響について分析した。イタリア遠征軍最高司令官ボナパルトは、イタリア遠征軍をコルシカ島で独立のために戦っていたコルシカ軍のように、団結力と誇りをもつ軍隊に変えようとした。そして激戦を乗り越えることでイタリア方面軍を団結させた。自由を重んじ団結していなかったイタリア遠征軍は、ボナパルトに統率され高い戦術を用いるようになって実力以上の力を発揮し勝利を得るようになった。またヴィゴ＝ルシヨンは、ボナパルトが最高司令官に就任した第4回目の従軍で初めて兵士を戦友と呼び、戦功を称えるようになった。またヴィゴ＝ルシヨンはボナパルトから戦功に対する褒賞を惜しみなく与えられたことで、イタリア方面軍の第32半旅団の一員であることに誇りを持つようになった。

南フランスのモンペリエ出身であるヴィゴ＝ルシヨンは、志願した当初は一定の年齢に達したフランス民衆の一員として革命の役に立つために戦っていた。その後、戦友との出会いによって軍隊生活が充実したものとなった。さらに最高司令官ボナパルトの統率によってイタリア方面軍の第32半旅団の一員として誇りを持つようになった。そのためヴィゴ＝ルシヨンは従軍を続け、生涯を戦友とともに過ごしたのである。

# 石器石材の画期とその影響

——愛知県における縄文時代中期・後期遺跡の剥片石器を中心として——

文学研究科歴史学専攻 考古学研究(Ⅰ)専修 栗 野 晋

本論では2つの問題を提起している。1つ目は主体石材が変化したことによる影響はどんなことがあるかである。内容としては、石材組成と器種組成がどのような影響を受けたのか、そして石鏃のサイズにはどのような影響があったのかである。2つ目の問題はなぜ主体石材の変化が起こったのかということで、主体石材の変化に与えた影響とはなにかである。この2つの影響を本論での問題とし紐解いてきた。

これらの影響を解明していく上で前提としているものが存在する。それは主体石材が変化しているということである。愛知県の縄文時代における主体石材の変遷は田部剛士氏によって既に研究されており、本論はそれに則ったものとなってくるだろう。そこで2つの影響を考える上で、今一度縄文時代中期と後期の主体石材を割り出し、中期から後期への主体石材の変化を確認しようと考えた。それが第2章である。

第2章では中期と後期の石材利用について再確認している。その結果、中期では黒曜石を主体とする地域とチャートを主体とする地域に分かれていることが判明した。しかし、石鏃をみてもチャートを主体とする地域でも黒曜石を多く利用していることが分かる。これが中期で黒曜石が主体となっているとする所以だと判断した。後期ではほとんどの遺跡で下呂石を主体としており、石鏃でも下呂石の利用が大部分を占めていた。

第3章では1つ目の問題として主体石材の変化によって受けた影響を解明している。まずは石材組成と器種組成の変化である。石材組成では黒曜石の絶対性と下呂石の多様性という考えを出した。黒曜石の絶対性とは、中期の黒曜石の利用が多い地域で他石材の利用が少なく、黒曜石の利用が少ない地域で他石材の利用が目立つことから考案した黒曜石に対する依存度の高さの表れである。下呂石の多様性とは、下呂石を主体として石鏃や他の剥片石器を製作していてもその他に様々な石材が利用されていることから、下呂石の依存度が黒曜石ほど高くないことを示している。つまり、主体石材が黒曜石から下呂石へ変化したことによって、利用する石材の種類が増加したということである。器種組成では後期で粗製

剥片石器の出現が見られている。粗製剥片石器の出現が多様な石材を利用することを助長したのではないかと考えられるし、多様な石材利用をするようになったため粗製剥片石器が出現したとも考えられる。

主体石材の変化によって受けた影響としてのもう1つは石鏃の変化である。石鏃のサイズの変化として見ている。主体石材が黒曜石から下呂石に変化したことで、石鏃の長さにはバリエーションが増えている。そして厚さでは、長さに対して薄く作られるようになっていた。これは石材の特徴の変化と捉えることができ、石材変化による大きな影響であったと言えるだろう。中期と後期の石鏃を見比べた場合、後期の石鏃の方が大きくても中期と比べて薄さを感じ取ることができるのではないだろうか。さらに2つの「限界」についても述べている。薄さの限界が後期の石鏃の方が低く、厚さの割合も後期の方が大きく低下している。このことから、主体石材が変化したことにより石鏃のサイズは大きくなるが、代わりに薄く作られるようになったと言えるだろう。

第4章では2つ目の問題として主体石材の変化に与えた影響を解明した。寒冷化による影響、下呂石の流通による影響、遺跡数の減少による影響という3つの影響を挙げた。それら3つの説は個別に作用するものではなかった。寒冷化による影響に至っては神奈川県での信州産黒曜石の主体利用と原産地の採掘址の存在から成り立たない説となっている。ではどのような影響であったかという、3つの説はそれぞれ繋がりを持ち成り立っていたようである。中期末から後期にかけての気候の寒冷化により山間部の遺跡数に減少が見られ、遺跡数減少による黒曜石流通システムの機能の麻痺から黒曜石供給圏への下呂石の流通を許すことになる。そしてそこに下呂石が定着し、それまで黒曜石が流通していた経路を通して愛知県へ流通するようになり黒曜石の流通が遮断される。黒曜石の流通が復活するも、一度定着した下呂石の流通に取って代わることができず、流通していてもわずかししか確認されない程度であった。これにより愛知県で主体石材が黒曜石から下呂石へと変化していった。これが3つの影響から読み取れた考えである。

# 石匙の研究

文学研究科歴史学専攻 考古学研究(Ⅰ)専修 小西 智也

本論は縄文石器の一つである石匙を扱ったものであり、その研究史、概論、生活用具論、技術信仰論、まとめの全5章で構成されている。以下その要点を簡潔に記す。

縄文時代の研究は縄文土器研究が主流であり、縄文石器研究は方法論や体系化が進まないまま放置されており、長らく日の目を見ることがなかった。その影響で縄文石器研究が縄文土器研究に遅れをとっていたのは事実である。しかし、この現状を打破しようと近年縄文石器研究の必要性が叫ばれるようになり、各学会誌で特集が組まれるなど注目される機会が以前より多くなってきている。

研究史をみてみると石匙研究はその形態的特徴からスクレイパー類と同様の機能を有すると決めつけられた機能論ありきで行われていた事実がある。そして、その万能ナイフや農具と推定された機能から縄文時代における必要不可欠な生活用具として扱われていた。その形態による推定という実証性の無い機能の決めつけによって植物資源との関係性も合わせて指摘されるようになり、縄文農耕論の根拠の一部を担う存在でもあった。また、そういった機能論ありきの研究方法を批判する立場をとる研究者も少なからず存在していた。使用痕分析によって科学的に石器の機能が実証されるようになると石匙にもこれが積極的に用いられ、形態的特徴からの推定にすぎなかった石匙の機能がその推定通りであったことがようやく科学的に実証された。そして、現代の石匙研究は石匙の製作技術や同一系統の共伴石器などを関連付けてその型式学的特徴を明らかにし、縄文人のライフサイクルや石器製作の技術基盤の格差を明らかに出来るように進歩している。さらに、範型論に模倣・模造・独創といった概念を加え「威信財」や「付加価値」といった縄文人の精神文化についても言及されるようになり、今までの型式学的研究には無かった石匙の分析方法が示されている。

石匙の最大の特徴はつまみ部にあり、この存在が同様の機能をもつとされるスクレイパー類との差別化になり石匙という器種を認定する定義の基準にもなっている。また、つまみ部を作り出す考古遺物は石匙以外にも存在しており縄文人のつまみ部への意識がうかがえる。

次に石匙の概要を整理すると東日本において縦型、西日本において横型という形態と分布の傾向がそれぞれみ

られる。また、一口に石匙と言ってもその中身は小形石匙、小形精製石匙、大形粗製石匙といったように三種類に大別が可能である。特に大形粗製石匙と小形精製石匙は出現時期も出土点数も限定的な独自の特徴を示す種類である。前者は前期に後者は中期を中心にその姿がみられ、それぞれが威信財や縄文農耕論というキーワードと関連性がある。汎用的な小形石匙は形態や型式に違いがあるが草創期から晩期までその姿がみられるために、縄文人が石匙を重要な生活用具として必要としていたことが分かる。石匙の基本形とも言えるだろう。石匙の分布地域による特徴的な型式としては鳥浜・天神・押出・松原型といったものがあげられる。

次に石匙と縄文農耕論の関係性である。先述したように石匙は機能論によって研究が行われてきたこともあり、植物資源との関係性が深い。そのため私は石匙の機能論と縄文農耕論は相関関係にあったと推測している。理由は両者ともその根拠を実証的に示すことが出来ず、互いの存在を根拠にして論を成り立たせていたのではないかと考えたからである。また、石匙の植物資源に対する機能が実証されてもそれが縄文農耕の存在そのものを証明するには至らないと考え縄文農耕論を否定する立場をとった。

最後に石匙の価値からみる縄文人の精神文化である。石匙の型式学的概念である範型論に模倣・模造・独創の三つの新たな概念が提唱されたことで石匙研究に威信財と価値を見出した研究が行われるようになった。それによって本来精神文化を表す石器ではない石匙の縄文人にとっての価値や信仰について述べられるようになった。実証性に乏しい精神文化を考えることは難しい部分がある。しかし、石匙は縄文人にとってどのような価値や意味があったのかは、石匙の副葬例や石器製作技術基盤の格差による模倣・模造の事実から考えていくことが出来る。

これが本論の要点である。全体的な傾向としては型式学的な視点よりも石匙の生活用具としての機能や研究史の背景に注目しており、具体的な遺跡の出土例や刃部加工のような型式学的視点からのテーマについては概要に触れる程度でほとんど述べてない。これは私が型式学的視点から石匙をみるのではなく、型式学的視点を用いて石匙をとりまく環境や縄文人の心象について研究したいと考えた結果である。

# 縄文時代の漆の研究

——赤色漆塗の糸・糸玉・繊維を中心として——

文学研究科歴史学専攻 考古学研究(Ⅰ)専修 田 中 明 子

12600年前の縄文時代草創期、鳥浜貝塚にウルシの木が生育していたことが科学的に明らかになった。ハゼやヤマウルシと異なりウルシは栽培されないと消えていくため、鳥浜の地で何らかの形で漆が利用されていたと考えられる。また最古(9000年前)の漆製品である北海道垣ノ島B遺跡の副葬品は、漆と赤色顔料を塗布する技術と繊維で編物を作る技術が融合したもので、初期的なレベルを超えた漆工技術であることから、日本列島において漆が利用され始めたのは旧石器時代にまで遡る可能性が高くなってきた。おそらくウルシの原初的利用は、石器の膠着材の一つであったと考えられる。

漆を塗料として利用するためには漆工技術とともに、ウルシの木の栽培、作業する工房など、年単位の時間と環境が必要であるため、安定した定住生活によって初めて漆製品の製作が可能になったといえる。狩猟・植物採取・漁撈活動の手段や技術が確立し、定住生活のもとで食料の獲得が可能になった早期に、垣ノ島B遺跡の赤色漆塗製品のような副葬品が出現したのである。

前・中期には東北、北陸、関東を中心に、土器・木器・櫛などの赤色漆塗製品や、漆工要具の漆液容器・漆濾し布が検出されている。それらの遺物から、遅くとも前期には縄文時代の漆工技術の土台が出揃っていたことや、搬入品とみられる漆製品が多くあることが明らかになった。漆の精製作業、赤色顔料の調達、焼き付け漆の土器などは、科学とは無縁な時代であったにもかかわらず、科学的な効果が生かされた技法である。縄文時代の人々は太陽や血の色である赤色を再生の象徴である聖なる色として崇め、祭祀や呪術の装飾品に赤色漆を盛んに用いた。すでに早期には周辺の沼沢地の浮遊物(鉄バクテリア)からパイプ状ベンガラを生成していた。中期の終わり頃には鉱物の朱から顔料を採取し、赤色顔料のバリエーションを豊かにする画期をなした。「赤色信仰」と言いたくなるほど美しい赤色を追求し続けたのである。漆工技術は赤色顔料と結びつくことで進化したといえる。

一方、高級な赤色漆塗製品を製作する集落だけでなく、漆を生活必需品として、土器や木器の補修・石器の膠着材や漆製品の塗り直しなどに利用する小規模な漆工を行う集落が普遍的に存在していたことが窺える。その漆工技術が、高度な漆文化の底流になっていたと考えられる。

後期は漆文化が質・量とも発展した時期である。その背景として、各地で祭祀や葬送の儀式が盛んになるに伴い、赤色漆塗製品の需要が高まったことがあげられる。この時期、北海道で漆工が開始された。特に透かし模様の赤色漆塗櫛が多く作られ、各地にその技術が伝わった。また各地で、産出地から搬入した朱を赤色顔料とした朱漆を表面に塗り、ベンガラ漆を下層に塗るようになった。下地にも発達が見られ、地の粉漆や炭粉漆に加え木屎漆が各地で用いられた。櫛、籃胎漆器は、下地漆の発達によってより堅牢さと美しさを兼ね備えた漆製品へと向上した。このように漆製品は祭祀や副葬に用いられた装飾品が目立つ。しかし、何度も漆を塗り直した木器から、液体用の容器として日常的に使用された漆器の存在が確認され、生活の中での漆の利用がわかってきた。

晩期には漆文化は亀ヶ岡文化圏を中心とした繁栄を見せる一方、晩期後半の北九州では大陸から伝わった新しい漆文化が生まれる。やがて弥生時代になるとこの新しい漆文化の広まりとともに、縄文時代の漆文化は終焉を迎える。ところが、この大陸からの漆文化も弥生時代後期には消滅し、次に大陸から伝わった黒色漆の技法が各地に広まり古墳時代へと継承されていく。

縄文時代の漆文化の当初から終焉までに亘り製作された漆製品が、赤色漆塗の糸・糸玉・繊維である。植物繊維糸は高度な技術がそれほど要らない日常品であるため調達しやすい胎であったと考えられる。早期～中期では、束のような平面的な形状を呈する副葬品であったが、後晩期になると玉を通したものと、結び玉や編みの形状をした糸玉などの立体的な形状へと変化する。平面的形状から立体的な形状への変化は、ヒスイなどの玉と同じようなパワーを持つ装飾品へと神格化が強まったことが想定できる。また、糸の本数・結びの数・結び目の間隔などに規格性があることが指摘されている。

赤色漆塗糸は、カラムシなどの植物繊維の糸に1本ずつ赤色漆を塗って作られたものであるが、赤色漆に荏胡麻油のような植物油を混和させることによって柔軟性が保たれる。そして漆糸を素材とすることで、複雑な編み方や結び目の糸玉に成形することができたのである。

しかし聖なる赤い糸玉は、黒を基調とする弥生時代の漆文化には受け入れられず消えていったと考えられる。

# 瀬戸内技法の伝播と変容

文学研究科歴史学専攻 考古学研究(Ⅰ)専修 増 田 正太郎

本論文は後期旧石器時代前半期後葉 AT 降灰前後の時代から発生し、列島各地の一定地域にその痕跡が認められ、盛行したと考えられる国府型ナイフ形石器の製作技法である瀬戸内技法に焦点を当て、国府系石器群の広がりから瀬戸内技法の伝播を各地域での瀬戸内技法の利用と国府型ナイフ形石器の形態などからその技術の変容を考察したものであり、全4章からなる。

第Ⅰ章では瀬戸内技法の提唱とその起源について述べ、瀬戸内技法の技術体系の変化を1960年以降の瀬戸内技法と現在主流となっている瀬戸内技法の第Ⅰ工程から第Ⅲ工程までを取り上げ、その変化について述べる。また技法的に類似する殿山技法について取り上げ、殿山遺跡の石器製作技術が瀬戸内技法によるものなのかを研究史から取り上げている。第Ⅱ章では二上山周辺遺跡の国府系石器群とその国府系石器群の編年的位置について広域火山灰と石器群の関係から年代を想定し、またその国府系石器群に該当する遺跡をあげ、サヌカイト原産地との関係を明確にした。また国府系石器群のひとつである奈良県鶴峯荘第Ⅰ遺跡についてまとめた。第Ⅲ章では近畿・瀬戸内地方以外の他地域における瀬戸内技法を伴う国府系石器群の概要について述べた。九州地方では長崎県福井洞穴の調査から国府型ナイフ形石器や瀬戸内技法に類似した横長剥片や石核類などが確認され始め、技術基盤や石器組成が不明なものが多かったものの、大分県岩戸遺跡の調査・報告以降瀬戸内技法の再検討がはじまる。この遺跡で縦長剥片剥離技術の中に共存する、瀬戸内技法の変異の評価が問題となった。これを契機に、九州地方は国府型ナイフ形石器や瀬戸内技法関連資料は再検討が進められる。また代表的な国府系石器群である佐賀県船塚遺跡と大分県岩戸遺跡についてまとめた。四国・中国・山陰地方では国府系石器群の出土が乏しく、横長剥片剥離技術は使われるものの瀬戸内技法で得られる翼状剥片の剥取がみられず国府系石器群との関与が乏しかった。しかし、愛媛県和口遺跡に関しては国府系石器群と

の関連性がみられ、瀬戸内出自の直接的な人の関与が認められる。東海地方では国府系石器群の多くは岐阜県西部にあり、国府系石器群と類似性がみられる石器群が確認される。しかしその他の地域では、国府型ナイフ形石器が単独で出土するなど散発的な様相をみせている。また代表的な国府系石器群である岐阜県日野遺跡、椿洞遺跡や愛知県で散見する遺跡についてまとめた。関東地方では54遺跡において国府系石器群ないし国府型ナイフ形石器の単独出土資料が存在する。特に北関東地方での検出遺跡では群馬県上井西伊熊遺跡、栃木県寺野東遺跡Ⅱ文化層、茨城県北西原遺跡(川口2002)の3遺跡のみである。国府系石器群としてはかなり零細な地域であり、東海地方と比べると精緻な国府型ナイフ形石器が数点検出される事例もある。そしてそれらの遺跡では、古本州島東北部との関連性を伺わせる要素が多い点があると考えられる。また代表的な国府系石器群に類似する上井西伊熊遺跡と埼玉県殿山遺跡についてまとめた。中部高地では国府系石器群の出土が極めて乏しく、瀬戸内技法の伝播の痕跡が皆無である。東北地方では総遺跡数に対して、国府系石器群の出土する遺跡の割合が高い。また、一遺跡で多数の国府型ナイフ形石器・同石器製作関連資料が認められる。このことは、在地の石材の中に瀬戸内出自の集団の影響があったと考えられる。また代表的な国府系石器群である山形県越中山K地点遺跡、新潟県樽口遺跡 A-KSE 文化層、新潟県御淵上遺跡について概要を記し、他地域の瀬戸内技法関連遺跡についての概要をまとめた。第Ⅳ章では第Ⅱ章～Ⅲ章の外観をもとに瀬戸内技法の伝播はどのような範囲まで広がっていったのか、その理由を検討した。瀬戸内技法の変容については石材の変化などから技法の変化について考察した。

本論は瀬戸内技法の伝播と変容について二上山周辺の遺跡と他地域の国府系石器群遺跡についてまとめ、その中でどのような範囲で瀬戸内技法が伝播し変化していったのかを考察したものである。

# 東北地方における中世陶器窯の研究

文学研究科歴史学専攻 考古学研究(Ⅱ)専修 小 山 美 紀

現在確認された中世陶器窯は約90カ所におよび、東北地方を中心とする一つの分布のまとまりがある。この東北諸窯に影響を与えたとされる珠洲窯・常滑窯・渥美窯を中心に比較検討を行い、東北諸窯の成立過程や展開を探ることを目的としている。

第1章では東北諸窯の分類に関する先行研究をまとめた。東北諸窯は須恵器系、瓷器系、折衷系の三つに分類されることがわかった。日本海側を中心に分布する須恵器系諸窯にはエヒパチ長根窯跡、南外窯跡群、新溜窯跡、北沢窯跡、背中炙窯跡がある。太平洋側を中心に分布する瓷器系諸窯には渥美系の花立窯跡と水沼窯跡、常滑系の熊狩A窯跡、多高田窯跡、一本杉窯跡、八郎窯跡、執行坂・長坂窯跡、狼沢窯跡、権兵衛沢窯跡、赤坂山窯跡がある。須恵器系と瓷器系両方の影響がみられる折衷系諸窯には飯坂窯跡群、大戸窯跡群がある。

第2章ではこの東北諸窯の先行研究や窯体構造、出土遺物を窯跡毎に紹介した。一定量の出土遺物がみられる窯跡では出土遺物の変遷を試みた。

第3章では東北諸窯に影響を与えたとされる常滑窯、渥美窯、越前窯、加賀窯、八尾窯跡、志加浦窯跡、珠洲窯の編年研究と窯体構造について紹介した。

第4章では窯体構造や出土遺物の分類・変遷から、東北諸窯の成立時期について検討を加えた。

窯体構造から瓷器系の窯は平面形の特徴から5類型に分類でき、燃焼室床面傾斜と分炎柱の長さなどからさらに細分できた。渥美窯に類似するものと常滑窯に類似するものがみられる。須恵器系の窯はいずれも平面形は類似するものの窯体規模に大きな違いがあり、小型のA類と大型のB類の2類型に分類できる。A類の窯体規模は珠洲窯と同等であるものの、B類は珠洲窯より長大であった。

次に出土遺物をみると、瓷器系の甕は渥美系のA類、常滑系のB類、折衷系のC類にわけられ、口縁の形状によってさらに細分できた。須恵器系の甕は口縁の形状からA～C類にわけられる。片口鉢は成形技法からA～C類にわけられ、卸目の有無からさらに二分できる。擂鉢は底部調整の仕方からA～C類にわけられ、擂目の有無でさらに二分できる。また、各類型の中での変遷の様相がわかった。

出土遺物の分類・変遷を比較した結果、渥美系の窯跡は渥美窯Ia～2a型式に併行すると考えられ、常滑系とされる窯は常滑窯5型式以前併行のI期、5型式併行のII期、5～6a型式併行のIII期にわけられる。また、

常滑系の窯跡は出土した甕と片口鉢の組み合わせからA～Cの3グループに分類でき、グループ毎に技術伝播の仕方が違うことが推測された。須恵器系諸窯は珠洲窯I2期併行のI期、I3期併行のII期、II1期併行のIII期、II2期併行のIV期、II2期以降のV期にわけられる。

第5章では東北諸窯、常滑窯、渥美窯、珠洲窯を含む須恵器系陶器の出土分布を従来の研究を基に調べ、時期別及び県別に東北地方での流通の様相を検討した。

東北諸窯は窯跡を中心に狭い範囲に流通しており、常滑・渥美窯は東北太平洋側、珠洲窯は東北日本海側に流通している。東北諸窯の流通範囲は常滑窯5～7型式、渥美窯、珠洲窯を含む須恵器系陶器の流通範囲に収まっていることがわかった。

第6章では成立時期、技術系譜、出土分布などから東北諸窯の成立過程や展開について考察した。

成立時期については、須恵器系は珠洲窯I2期からII1期に成立したと考えられ、瓷器系の渥美窯の影響を受けた窯は渥美窯Ia型式期に成立したと考えられる。常滑窯の影響を受けた窯は常滑窯4～6b型式期に成立したと考えられ、5～6a型式期に成立した窯が多い。折衷系とされる飯坂窯跡群は珠洲窯I2期に成立し、須恵器系の影響が強く残る。大戸窯跡群は珠洲窯I3期に成立するが、II2期には瓷器系へ転換し瓷器系の影響が強くなっていくことがわかった。

技術伝播については、水沼窯跡は渥美窯の影響を受けたといえるが、花立窯跡について断定はできなかった。常滑系についてはA・Bグループは山茶碗窯の影響を受けた可能性があり、Cグループは甕焼成窯の影響を受けたと考えられる。須恵器系諸窯は珠洲窯の影響が考えられ、折衷系も成立期には珠洲窯の影響を受けたと考えられる。

成立過程については、常滑・渥美・須恵器系陶器の出土分布と東北諸窯の流通範囲が重なっていることや、瓷器系諸窯は常滑・渥美窯製品の流通量が減少した時期に成立していること、須恵器系諸窯は珠洲製品が東北に安定的に流通する以前に成立していることから、東北諸窯は常滑・渥美・珠洲窯製品の補完を目的とし成立するものが多いと考えられる。

今回東北諸窯は補完を目的として成立したという推測に至ったが、窯体構造や出土遺物についての考察が足りず、技術系譜についての検討が充分でなく、再検討する必要がある。

# A Comparative Corpus-based Study of Vocabulary Used in the English Tests for the National Unified Examinations in Japan and Korea

文学研究科英語圏文化専攻 英語圏文化研究(Ⅲ)専修 金 孝 男

## The object of this study

This thesis is intended to compare English examinations of the College Scholastic Ability Test in Korea (hereafter CSAT) and the National Center Test for University Admissions in Japan, commonly referred to as the “Center Test,” (hereafter JCT), both of which have been conducted once a year for more than one decade. The focus of this research is placed on the lexes in the main text of the examinations obtained for analysis. In addition, the variety and number of examination questions as well as the genre of the reading sections are discussed in the latter half of this paper. Based on these analyses, some suggestions are made on how to improve students’ proficiency in English both in Korea and Japan.

## Research method

The first thing to reveal patterns in language is to create a corpus of English lexes used in both examinations over the last four years, i.e., 2010–2013. All the data is analyzed by the use of AntConc3.2.4w, a freeway concordance program for analyzing electronic texts. One of the data collection sources is *Database Center Ten 2013 English* on CD-ROM released by JC Educational Institute, Tokyo. The disc carries all the examination questions contained in the National Center Tests for University Admissions conducted in the period between 1987 and 2013. The author takes in all the relevant English questions of JCT from the CD-ROM, and combines the texts into one large text file. The data is then analyzed based on a concordance generated with the assistance of the above-mentioned software program. The other data source is the website of the Korea Institute for Curriculum and Evaluations, which is only provided in a PDF format. Because of the difficulty in converting the PDF file into text, the author is obliged to re-type all the questions items in *Word* format so as to use a program to read them as a text file. These question items are compared with those of JCT used for the last four years.

Two other tools are used for this analysis: JACET 8000 Level Marker (2004) and *Textalyser*. The former is an online

database supervised by a research group of JACET or the Japan Association of College English Teachers. This online tool can help classify vocabulary into eight levels in accordance with the Japanese context. By using the JACET 8000 Level Marker, we can find which words belong to which levels. The latter is also an online text analysis tool, which is used to check the number of sentences, sentence length, and average word length in JCT and CSAT respectively.

## The results of this study

There seems to be a marked difference in concept between CSAT in Korea and JCT in Japan. CSAT is a kind of test which focuses on how much entrance test-takers can keep up with general English to be taught after they are enrolled at a college or university, whereas JCT is a test which assesses high school students’ English proficiency at the time when they take the “Center Test.”

In case of CSAT, test-takers are expected to collect information and grasp the gist of long and complex sentences as fast as possible. However, a mismatch exists between what students are trained to do in senior high school and what is expected of them in the entrance examinations. In accordance with the progress in communication technology, CSAT is required to resolve this discrepancy and upgrade the level of vocabulary in particular.

The following three proposals should be made to improve JCT when promising students are required to keep up with the era of globalizations. Firstly, it should increase the quantity of test questions and raise the level of difficulty so that it can give a more accurate assessment of the level of the students’ English proficiency. Secondly, JCT should be required to create more practical and useful questions for the use of the young generation in this country. Thirdly, JCT should omit some questions about pronunciation. They seem to be somewhat redundant because the listening test was added to the Center Test in 2006 and almost all the applicants are supposed to take it these days.



# ピーターラビットにおけるイギリス食文化

文学研究科英語圏文化専攻 英語圏文化研究(V)専修 加 納 芳 文

本論文は、イギリス食文化に対してピアトリクス・ポターの作品群——特に *The Tale of Peter Rabbit* を始めとする一連のシリーズ——を用いてアプローチをしたものである。加えて、動物たちの食べるもの等の描写から、それがいかに正確であるのか、そしてそれを生み出した作者のピアトリクス・ポターについても述べる。

一章では、ピアトリクス・ポターの生涯について論じ、特に児童文学作家としての彼女を形成するに至った重要な出来事について言及する。ただし本章は、本論文を理解するうえで必要と思われる彼女の伝記的な事柄について記述するにとどめている。

二章では、作中の動物の食べるものや態度について、*The Tale of Peter Rabbit* を始めとするウサギを主人公にした三冊の本を用いて論じている。これらの物語を論ずる理由として、本論文で取り上げた作品群の中で、この三冊は共通の登場人物たちが描かれて、さらに細かな一つのシリーズとして成立しているため、比較がやりやすかったためである。具体例として、ウサギたちの食べているものについての描写から、その食べ物がウサギの食性に適しているか？といったことや、その食事の描写が作物を喰い荒らす害獣としてのウサギをどう描いているのか？といったことをまとめている。また、このウサギが主人公となったシリーズの中で特に *Peter* というウサギの態度の変化が顕著であるため、それを起こした要因が何か？といったことについても言及している。

三章では擬人化された動物たちの食べるものや行動から、イギリス食文化がどのように描かれているのかについて三つの作品——*The Tale of Jeremy Fisher*, *The Tale of The Pie and The Patty-Pan*, *The Tale of Mrs. Tittlemouse*——を用いてアプローチしている。例えば、田舎のジェントリとして擬人化された *Jeremy Fisher* の行動の描写に労

働している場面が存在しないのは、当時のジェントリが日々の労働以外で収入を得ていたことの表れである。また、カエルの友人であるカメの *Mr. Alderman Ptolemy* が招かれた晩餐にレタスを持参することは、当時流行していた菜食主義の表れである、といった具合である。他にも、田舎の中流階級のアフタヌーン・ティーを描いた *The Tale of The Pie and The Patty-pan* と、田舎の主婦を描いた *The Tale of Mrs. Tittlemouse* を用いて、*Jeremy* の場合と同じようにイギリスの食文化と慣習についても論じている。

四章では、動物たちが擬人化された時とそうでない時に起きる食を始めとする諸変化について、二つの作品——*The Tale of Two Bad Mice*, *The Tale of Pigling Bland*——を用いてアプローチしている。ポターの作品群において、動物が擬人化された時とそうでない時は非常に厳密に書き分けられており、そのスイッチである服の有無について主に論じている。*The Tale of Two Bad Mice* においては、二匹の悪いネズミは服を着るまでは暴虐の限りを尽くす害獣であったが、服を着た後は人間の夫婦によく似た振る舞い（擬人化の例）をしている。この変化は他の作品でも顕著なものである。*The Tale of Pigling Bland* では、服を着るまでは農場経営を傾けるほどの食欲を誇っていた家畜の一匹として描かれる *Pigling* が、服を着た途端に出会った人が信用できるかを考えて判断できる賢いブタになっている。これは管理されるだけの家畜には出来ないことである。こうした対比を服というスイッチを中心に論じる。

結論では、このようにポターの作品に描かれたものが、当時の食文化や動物の食性を考えた非常に正確なものであったことをまとめている。

# 陳述副詞の比較研究

——「できるだけ」「なるべく」「極力」をめぐる——

文学研究科日本文化専攻 日本語研究(Ⅱ)専修 何

琦

本論では、陳述副詞「できるだけ」「なるべく」「極力」の共通点と相違点について『日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ: Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)と『中日新聞データベース』から集めた用例の分析に基づき考察を行った。また、日本語の「極力」と中国語の「極力」の共通点と相違点について、『日本語書き言葉均衡コーパス』と『北京大学中国語言学研究中心語料庫検索系統(ウェブ版)』(Center for Chinese Linguistics PKU)から集めた用例の分析に基づき考察を行った。

その結果、以下のことが分かった。まず「できるだけ」「なるべく」「極力」の共通点は3点ある。①三語とも「できる範囲のことはすべて」という意味があり、この意味を表したいときに使う。②三語とも催促や時短希望によく使われている。③三語とも希望・助言・判断・啓示・宣言などを導く叙法的性格がある。「できるだけ」「なるべく」「極力」の相違点は4点ある。①「できるだけ」と「なるべく」の後ろに助詞がある場合、それぞれ一つの助詞のみ使えることと共に、互換性がない。「できるだけ」は「できるだけ+(N)」のみ、「なるべく」は「なるべく+なら」のみ取ることが可能な助詞である。「極力」の後ろに助詞を使用することは許されない。②「できるだけ」や「なるべく」と比べて、「極力」の方は、「少なく」のような数量の少なさを表している副詞句が多く、数量の少なさを表したいときによく使用される。③人の意志によりコントロールすることができる事については、三語とも使えるが、人の意志によってコントロールすることが出来ない事態や、自然に任すしかないような事態については、「できるだけ」や「極力」を使用すると不自然だが、「なるべく」は使用することができる。

④話し手自身の行動、決意、聞き手に対する希望、要求などについては、「極力」と「できるだけ」の方が「なるべく」より強度が高い。

また、日本語の「極力」と中国語の「極力」の共通点と相違点は以下になる。共通点は2点ある。①両語とも「力の限りを尽くすさま」という意味を表したいときに使える。②両語とも物事や事態が良い方向に発展することへの希望を表すときに「極力」を使用する。相違点は5点ある。①「極力」が動詞を修飾する場合、日本語では物事や事態に否定的な態度、感情を持っている動詞の使用率が高く、物事や事態に肯定的な態度、感情を持っている動詞の使用率が低い傾向がある。一方、中国語では物事や事態に肯定的な態度、感情を持っている動詞の使用率が高く、物事や事態に否定的な態度、感情を持っている動詞の使用率が低い。また、「極力」が物事や事態に対する主観的な感情を含んでいない単純な動作を表す動詞を修飾する場合、日本語では「極力」の許容度が高く、中国語では低い傾向にある。②中国語の「極力」は、褒義動詞と疑義動詞が両方とも使われている。それに対して、日本語の方は、「極力」が修飾する動詞は中国語の貶義詞に当たる動詞に使えないのが特徴である。③物事を進めるときや褒めるときに、中国語は「極力」を使用することが多いが、日本語は「極力」を使用する程度が低い。④現代中国語では双音節動詞が圧倒的に多いが、日本語の方は単音節動詞(和語動詞)と双音節動詞(漢語動詞)が混在している。⑤「極力+動詞の否定形」の場合は、日本語の方がよく使われていて、現代中国語の例は極めて少ない。

以上に加え、「できるだけ」「なるべく」「極力」の三語は陳述副詞に属することを明らかにした。

## 築城・籠城伝説の諸類型

文学研究科日本文化専攻 日本文化研究(V)-2 専修 伊藤 嘉孝

城とは、敵の来襲を防ぐための軍事施設、また政治の中心地であり、本来民俗学の研究対象とはなりがたい。しかし、城には伝説が伝わっているものが多数ある。

本論文では、「築城伝説」および「籠城伝説」を中心に「城の伝説」を類型化した。「築城伝説」とは、城主が築城する際に何らかの力によって、城が神秘的な力を持つ、又は、なかなか思うように築城できないが、動物などの協力を得てやがて城が完成するという伝説である。「籠城伝説」とは、城が攻められた時に何らかの力が働き敵を撃退する、或いは一時的に撃退したが後に城は落城するという伝説である。そもそも、築城は城を建てることであり、籠城とは城に籠もって戦うことである。一見すると相反するような2つの状況であるが、「築城伝説」における築城時に城が持った神秘的な力が籠城時に発動し、攻め手を撃退する伝説が数多く残る。このように、「築城伝説」、「籠城伝説」どちらかの要素を持つ伝説、または双方の要素を持つ伝説を「築城・籠城伝説」と呼ぶこととした。

まず、本論文で扱う「築城・籠城伝説」を「築城伝説」、「籠城伝説」、「双方の要素を持つ伝説」というように形式で分類した。「築城伝説」は6例、「籠城伝説」は16例、「双方の要素を持つ伝説」は3例確認された。

次に、伝説に登場する動物の動きにより分類をした。登場する動物に注目すると、蛇の伝説が多くみられた。蛇の伝説は、「城が攻められた時に霧が発生し城が守られる」という「霧吹伝説」などにみられ、城と雨乞や龍神信仰との関わりを見出すことができた。また、築城に

狐が活躍し、その城では稻荷信仰が盛んになったという伝説もあり、稻荷信仰との結びつきを確認することができた。さらに鳥の事例の中には、鳥が登場して築城に適した土地へ築城者を誘導する伝説があり、神武天皇を畿内へ導いた八咫鳥の神話のような要素を持っているものも見受けられた。これらのように、「築城・籠城伝説」に登場する動物は、蛇や龍＝雨、狐＝稻荷信仰、鳥＝八咫鳥というようにそれぞれの信仰や神話との結びつきを指摘できた。

城の異名に注目すると、「城の伝説」が伝わる城の中には、伝説にちなんだ名称のものを多数確認した。一方で城について書かれた江戸時代の地誌を確認すると、伝説にちなんだような異名でも、伝説と関わりがないものも確認された。

以上、「築城・籠城伝説」を動物の動きを中心に類型化した。また、伝説の伝わる城の異名に注目し、伝説と異名の結びつきを確認した。しかし、今回確認した「城の伝説」において、他の信仰や伝説が基礎となった伝説が多く、「城の伝説」すべてに共通して見られる特異な要素の集合というものは確認できなかった。その点では、さらに多くの事例を扱い確認する必要があるだろう。

城には数多くの遺構が残り、遺物も発掘によって多く発見することが可能である。また、地方政治の中心であるため古文書も数多く残っている。「城の伝説」の研究においてそれらを積極的に活用し、考古学、歴史学の垣根を越えて研究していくことが伝説研究のみならず、城の研究を進展させるために必要となるであろう。

# 鰻裂き庖丁と目打ちの地域差に関する研究

文学研究科日本文化専攻 日本文化研究(V)-2 専修 松 本 和 紘

鰻裂き庖丁とは、鰻を捌く際に用いられる専用の刃物であり、鰻をまな板に固定する「目打ち」とともに用いられている。鰻裂き庖丁と目打ちの形状は地域によって大きく異なる。筆者は2010年の卒業論文「鰻裂きの研究——調理法と専用道具の地域差について——」において関東・名古屋・大阪・京都の4地域で現在用いられている鰻裂き庖丁と目打ちについてその形状と使用方法を調査・比較し、鰻裂き庖丁と目打ちの登場は「開いて焼く」蒲焼きの出現に対応したものと考えられると推測した。粘液で保持が困難かつ細長い体をした鰻を商売として大量に捌く必要が生まれた結果、鰻を捌く事に特化した庖丁が必要になったと考えられるからである。また、鰻裂き庖丁と目打ちの地域差は、地域ごとの食文化の違いによるものと推測した。本論文でははじめに、地域の食文化、特に鰻の食文化の違いを考察する材料にするため、大正末期から昭和初期にかけての日本各地の家庭の食生活を調査した『日本の食生活全集』（農山漁村文化協会 全50巻）より、鰻の聞き方や、用いる道具に関する記述のあるものを抜き出し、比較した。鰻裂き庖丁を家庭で用いている事例は見られず、刃物は出刃庖丁や刺身庖丁で、目打ちは鉋や釘など身近なもので代用している事例が多く見られた。これは、2010年の卒業論文で筆者が推測した、限定的な用途の包丁を成立させるための以下の3条件にあてはめることで説明できる。

- ①対象となる食材の調理に特殊な操作や性質が要求されること
- ②対象となる食材を頻繁に調理する必要があること
- ③対象となる食材を短時間で大量に調理する必要があること

上記の内、鰻という特殊な食材を扱う点で条件①に該当するが、鰻の調理が専門である鰻屋などと比べるとその量は少ないと推測され、条件②と条件③を満たしていないと言えるからだろう。また、滑りやすい鰻を効率よく押さえるため、かぼちゃの葉、袋や布、塩などを補助的に用いていた。

本論文では2010年の卒業論文で扱った東京・名古屋・大阪・京都の4地域に加えて、福岡県柳川市と高知県土佐市の事例を加え、鰻裂き庖丁の多様性と使用される地域、その背景について考察した。

福岡県柳川市の鰻卸問屋、江口商店の社長、江口良二さんが使用している包丁は、「小出刃」と呼ばれる出刃庖丁の一種であった。

必ずしもその地域において一般的とされる形状のものが使用されているとは限らず、また、鰻を専門に扱う店舗であっても、その地域・店舗の鰻の調理形式に要求される機能を満たせるのであれば、専用の鰻裂き庖丁以外を使用している事例が存在することが分かった。

高知県土佐市、土佐刃物流通センターで調査した鰻裂き庖丁は、四国を含む関西地方全体に流通しているという。筆者はこの形式の鰻裂き庖丁を「関西広域型」と呼称する。

調査した鰻裂き庖丁を比較すると、刃渡りに関しては関東型が最も長く、全長に対する刃渡りの比率も高い。関西広域型は、九州地方で一般的とされる有頭背開きで鰻を落とさず、丸のまま蒸さずに焼くという調理形式に合致する形状であるといえる。また木製の柄が付いており、かつ京都型のような重量のある刃ではないことから、目打ちを打ち込む際には、柄尻で打ち込む関東型のような目打ちか、名古屋型や京都型のように手で直接握って打ち込む目打ちが適していると考えられる。関西広域型は全長や刃渡りが比較的名古屋型に近く、また切っ先が尖っていない点も共通する。これらの点から、名古屋型と関西広域型は前後関係にあるか、同時期に派生したものではないかと推測される。

また、鰻裂き庖丁に要求される機能と形状の関係は以下のようなものであると推測した。

細長い体型をした鰻を開くのに、長い刃渡りは不要である。また、身を開いて中骨をとる工程では刃を骨に当てながら使うため、ある程度の頑強さが求められるといえる。「鰻を開いて中骨を取り除く」という機能だけであれば、「小ぶりで厚みのある刃物」で要求を満たせると考えられる。これには名古屋型、大阪型、京都型、関西広域型、福岡の江口商店で使用されていた小出刃が当てはまる。また、鰻は二枚おろしではなく開きにするため、尖った切っ先も不要である。先に挙げた鰻裂き庖丁の中では、大阪型と小出刃以外がこれにも当てはまる。そこに「鰻を落とす」機能が加わると、切り始める際に尖った切っ先や角が必要になる。これは大阪型と関東型が当てはまる。

さらに「頭を切り落とす」機能が求められると、ある程度の刃渡りに加え、使用者が握った際に刃が握った手より下に位置していなければならない。これには関東型が当てはまる。